

# 知的障害児及び自閉症児のあつまりにおける応答行動の形成

—視覚的手がかりの活用を中心に—

○飯島徹 田上幸太

柘植雅義

(筑波大学附属大塚特別支援学校)

(筑波大学人間系)

KEY WORDS: 知的障害・応答行動・視覚的手がかり

## 【目的】

児童同士の相互交渉を促す機会として、朝の会（以下、あつまり）を設定し、聞き手の働きかける応答行動がどのような手続きで形成するのか検討した。

## 【方法】

特別支援学校小学部 1、2 年生の 8 名を対象とした。本発表では、(A 児、B 児、C 児) の 3 名を分析対象とした。20XX 年 12 月から 3 月までの約 4 ヶ月間、原則として、1 回につき、約 40 分間、あつまりを行った。全セッション数は 29 回であった。行事や時間等により、児童の係活動を変則的に減らした。あつまりは、網谷・武蔵 (2008) の授業を参考に設定した。児童全員に係活動を割り振り、前に出て発表するように設定した。係活動は①日直、②今月の歌、③いいです棒を配布、回収、④日付、⑤曜日、⑥天気、⑦予定、⑧給食で、前に出て発表するように設定した。先行研究 (網谷・武蔵,2008) では、対象児のやりとりを促す手立てとして、花丸カードなどの視覚的手がかりを用いていた。そこで、本研究では、介入期に視覚的手がかり (いいです棒) を用いて、聞き手である児童が応答行動の生起を高めるように設定した。いいです棒とは、いいですと平仮名が書いてあり、字の下に児童の写真の貼り付けた物である。ベースライン期 (セッション 1 から 3) では、日直と聞き手である児童は、ジェスチャーと「いいです」と口答で応答する手続きであった。MT は、日直の隣にいて同時にジェスチャーを示した。介入 I 期 (セッション 4 ~20) では、日直と聞き手である児童は、「いいです棒」を持ち、応答する手続きであった。MT は、介入 I 期と同様に、日直の児童と同時に「いいです棒」を挙げた。介入 II 期 (セッション 21~31) では、介入 I 期と同様に「いいです棒」を活用した。MT は、日直の児童が挙げる時、「いいです棒」を挙げなかった。遅延手続きを用いて、聞き手である児童の反応を把握し、プロンプトレベルで援助した。

## 【分析方法】

各場面の課題を分析し、課題項目を設定した。対象児の課題遂行レベルをプロンプトレベルで評価した。プロンプトレベル 7 は自発、6 は、言葉掛け (児童)、5 は、言葉掛け (教員)、4 は、動作指示 (音声言語なし)、3 は、言葉掛けと動作指示、2 は、身体ガイド (児童)、1 は、身体ガイド (教員)、0 は、機会なしで評価した。本研究は、研究対象である児童に対して身体的な危険性はありませぬ。

## 【結果】

図 1 より、A 児は、セッション 15 から、自発レベルで挙げる行動が認められたが、介入 II 期より、いいです棒を挙げる行動が減少した。図 2 より、B 児は、セッション 8 以降、自発レベルで、いいです棒を挙げる行動が高まった。図 3 より、C 児は、介入 II 期のセッション 24 より、いいです棒を挙げる行動が高まった。

## 【考察】

日付場面における C 児のいいです棒を挙げる行動では、ジェスチャーで応答する条件において、レベル 0 であった。介入 I 期では、セッション 15 よりレベル 7 になり高まった。セッション 18 からレベルが低下したのは、前で発表

している係の方を見続けることが難しかったことが考えられる。介入 2 期のセッション 15 も同様のことが考えられる。図 2 より、G 児のいいです棒を挙げる行動では、セッション 8 以降、レベル 7 になり高まった。いいです棒という視覚的手がかりが有効であったと考えられる。図 3 より、E 児のいいです棒を挙げる行動では、セッション 24 よりレベル 7 になり高まった。遅延手続きにより、周囲や係の方を見るという行動が高まった。遅延手続きを活用することでいいです棒を挙げるという行動へと高まったと考えられる。C 児のように、日直の方を見続けることが難しい場合、予め働きかけることを予告するような手続きを用いていくことが必要であると考えられる。前に注目し応答行動を形成する方法については、今後の研究課題である。

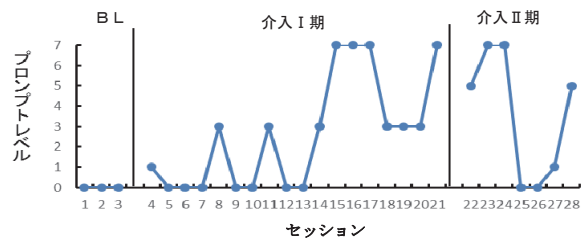


図 1 A 児 日付 (いいです棒挙げるプロンプトレベル)



図 2 B 児 日付 (いいです棒挙げるプロンプトレベル)

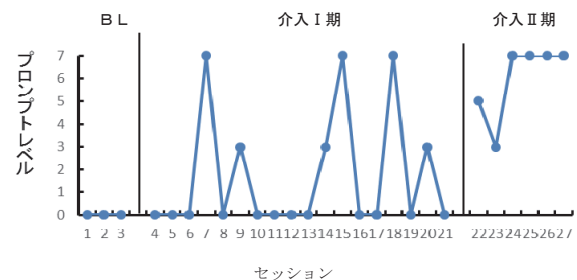


図 3 C 児 日付 (いいです棒挙げるプロンプトレベル率)

【附記】本発表にあたっては、保護者及び学校管理者の承認を得ています。本研究は発表者のほか、小家千津子教諭と共同で取り組んだものである。

## 【文献】

網谷優子・武蔵博文 (2008) 発達障害児の集団における社会的コミュニケーション環境についての検討—「発表者」「聞き手」の役割学習の効果—。特殊教育学研究,45(5),265-273.

(IIJIMA Toru, TAGAMI Kota, TUGE Masayoshi)